

相撲協会と力士と親方連のみんなが一丸となって

とりあえず次期横綱誕生の道が開けた

逸ノ城(7月場所)、玉鷲(9月場所)、阿炎(11月場所)と3場所、平幕優勝が続いた後の大相撲初場所は、照ノ富士の連続休場と正代の関脇陥落によって一大関体制という異例の形になった中で、連続して結びの一番を取り続けた貴景勝の優勝で優勝杯が久し振りに大関の手に戻ってきましたね。実際に記者会見で、「突き押しの自分の相撲スタイルは、激しさを失ったら引退した方が良い。体がないので激しさだけは持っておこうと思っている。」と語る反面で、1年前から取り組んできた“相撲の幅を広げる”努力が実ってきたようで、千秋楽の琴勝峰戦ではすくい投げ、明生戦などでは小手投げと投げ技を鮮やかに決めていました。貴景勝が来場所も優勝することができるのであれば、一挙に横綱に推挙されることとなり、照ノ富士は自分の横綱昇進時に白鵬がしたのと同様に「後を託した」とばかり引退することになっていくかもしれませんね。

大関不在の事態が現実

一方、次期大関についてはここしばらく空位が続きそうですね。関脇陣でも大関復帰が期待された正代が6勝9敗の負け越し、元大関の高安も1勝5敗9休み。辛うじて若隆景が9勝6敗、豊昇龍が8勝7敗勝ち越すことができました。「どうなるのかなあ大相撲の今後は」(http://odako11.net/Happyou/happyou_sasaki/happyou_sasaki_71.html)の2020.02.25付Web11記事の小見出しで「いよいよ大関がいなくなっちゃった」とボヤいていた通りの事態になってしまいました。同じ記事で「日本人力士がモタモタしていると、大関陥落後序二段まで陥落していて、ようやく戻ってきた十両で優勝したモンゴル人力士の照ノ富士(28)の大関復帰に先を越されてしまいそうですね。」と書いていますが、ことによると、照ノ富士と同様に大関から序二段まで陥落していて、ようやく戻ってきた十両で、3年後のこの初場所で優勝した朝の山が大関になるまで待たなくちゃならないのかなあ。

肝要なのは「自分を育てる」ための訓練

昨秋のWeb11記事「大相撲秋場所を顧みて」で私は優勝した玉鷲について「鍵は“自分の相撲”と“ファンに対する感謝”」と書いています(http://odako11.net/Happyou/happyou_sasaki/happyou_sasaki_114.pdf)。貴景勝がしてきた“相撲の幅を広げる”努力も然りですが、2021年5月場所に大関に復帰した照ノ富士には大関から陥落する以前にも見られなかった力強さと逞しさが見られました。膝の治癒に励みながら腕力や体幹の強化などのための筋肉トレーニングを積んでいたに違いありません。そして、ごつつくて守りも強い「自分の相撲」を確立して無敵状態で連覇して横綱に昇進していったのです。いずれにしても「自分の相撲」の強化のためにはそれに見合った体や技または心の鍛錬によって「自分を育てる」ことが必要なのですから、朝の山が照ノ富士の後を追って大関に復帰してさらに横綱を目ざせるようになっていくかどうかは、不祥事件で6場所出場停止の懲戒処分を受けて序二段まで陥落して復帰してくる過程で「自分の相撲」を確立するための心技体の特別な訓練によって「自分を育てる」ことができているかどうかにかかっていると言ってもよいでしょうね。

部屋別の稽古ばかりしていても成長することができない

その昔大関だった小錦さんは、ギラギラした眼光から、「ウルフ(狼)」と名づけられ、大型力士をバツバツと投げ飛ばす戦いぶりで喝采を浴びた横綱千代の富士について、「横綱という立場なのに恥も外聞も捨て、ぼくのいた高砂部屋に毎日出稽古にやって来て、こっちがギブアップしたくらい、何度もぶつかり合いました。“もう絶対こいつには負けない”という強い意志を感じました」と述懐していました。1984年の秋場所に小錦との対戦で猛烈な突っ張りを何発も浴びて土俵際に突き落とされたことに挫折感を感じたことが千代の富士を発奮させたようですが、後にこの小錦さんが日経

のスポーツ記事欄に「部屋別の稽古ばかりしていても成長することができない」と書いていたのは、力士としては小柄のうえ、肩をすぐ脱臼する癖に悩まされたが、1日500回の腕立てやぶつかり稽古で徹底的に鍛えて鋼のような肉体を作り上げた横綱千代の富士の体の鍛え方以上に出稽古という“部屋別の稽古では得られない”「自分を育てる場」を重視するよう言いたかったのに違いありません。

力士間の相互啓発の機会の乏しさが大関不在の事態の根因

大相撲の力士には現時点で44の相撲部屋があり、力士はそのいずれかに所属して部屋が持つ施設で共同生活をしています。稽古も基本的にこの部屋の中で、部屋の力士同士で行われているのですから、一般的には「部屋別の稽古」が力士を育成する機関になっていることには間違いがありません。しかし、1部屋の平均力士数は僅か14-5人で、しかも幕内力士が1人もいない部屋もあります。ですから、部屋頭の幕内力士がいる場合には、部屋別の稽古も下位力士にとってはそこそこ成長の場となるのですが、部屋頭の力士にとっては刺激を与えてくれる相手が不在の、成長ではなくて単なる整調の場に過ぎなくなることになりがちです。そこで、より力量に見合った力士、より自分を鍛え上げてくれる力士と稽古をするため、違う部屋へ出向いて稽古をすること(これが「出稽古」)が極めて重要だと小錦さんは力説しているように見えました。思えば、現在の次期横綱・大関候補不在の事態は、出稽古のような「力士間相互交流による相互啓発」の機会が行きわたっていないことに原因がありそうです。

出稽古の発展形として設けられた幕内力士合同稽古にご注目を

前述の千代の富士、そして後代の横綱・白鵬も出稽古によって「自分を育てた」のでしょうし、現在でも出稽古に出かける力士はいると思います。しかし、横綱、大関といった高位者なら「稽古をつけてやる」という側面がありますから出稽古に出やすい立場にあります。しかし、低位者が自ら望んで出稽古に出かける立場は取りにくいのではないかと思います。また、他の部屋との交流が苦手が出稽古を申し出ることができない親方や力士も多く、逆に他の部屋からの出稽古を受け入れるのに消極的な部屋もあることでしょうね。ですから、3年前ほどに始まった幕内力士合同稽古は、出稽古の発展形として大いに注目に値するところだったのだと思います。しかし、マスメディアの注目度は低く幕内力士合同稽古実施の報道記事も跡を辿りにくいのですが、多分2022/4に5月場所を前に開かれた力士合同稽古に高安と豊昇龍を含めた16名の関取が参加したのが参加者数最高のようなようです。また、2021/2の3月場所を前に開かれた力士合同稽古には、当時の白鵬、鶴竜両横綱をはじめ高安、豊昇龍、若隆景、霧馬山、逸ノ城、阿武咲、明生らが名を連ね、それぞれが「力士合同稽古に参加することによって自己を育てた」ことを立証しているようです。

日本相撲協会の力で次代横綱・大関候補が続出する緊張感あふれる大相撲界に是非

新型コロナウイルスの影響により出稽古禁止が続く中で開かれた2020/11力士合同稽古に参加した貴景勝は「成長のチャンスなので積極的に参加して、しっかり自分の相撲を磨いていきたい」と話す反面で「他の部屋に行く出稽古とは異なるが、力士合同稽古は他の部屋の力士と胸を合わせる場となったが、これは、みんな好き勝手やっていたらできなかったことであり、協会とみんなが一丸とならないうとできなかったと思う。」と感謝の辞を述べています。日本相撲協会が更に力士合同稽古を参加希望者ばかりでなく全員参加の義務を負わせること。更に、それぞれの部屋付きの親方連も力士たちに帯同して力士合同稽古を自分の指導力向上の場にする事としたら部屋別稽古の効果も上がって、次代横綱・大関候補が続出する緊張感あふれる大相撲界にすることができるのになあと八十路男の夢を膨らませてしまいました。ご同僚の諸兄姉はどのようにお考えでしょうか次期大関候補がいない今日の角界をご覧になって。